南浜中

夢や希望に向かい、主体的に学ぶ生徒の育成

～問題発見につながるための導入と個に応じたまとめの工夫～（３年計画の１年次）

校長名　　佐　藤　公　一

１　研究主題について

本校では校訓に「自主」「協同」を掲げ、主体的に、なおかつ個々の役割や個性を尊重しながら、お互いを高め合える集団づくりに取り組んできた。本校生徒は、小・中学校ともに小規模校で学年を超えて協力し合いながら生活しているため、自然と助け合いの精神が身に付いており、教室内や異学年との人間関係も良好である。授業での教え合いや課題解決に向けた取組など、学びの場面での協調性は高い。

しかし、その反面、ほとんどが小学校からの顔見知りであることから、お互いの能力もよく知り得ており、それが切磋琢磨する気持ちに結びつきにくい要因となっているとも考えられる。

生徒は総じて素直であるが、その素直さゆえに、与えられた仕事に対して責任をもって取り組むことができる傍ら、自主的かつレベルアップした活動や、場に応じた表現については消極的である。そのため、もてる力を発揮しきれていない傾向があり、学習内容の定着も低い。

そこで今年度は、３年計画の１年次と位置づけ、主体的な学びの実践として、授業の導入部に力点を置いた問題解決的な学習と、授業のまとめの段階で「まとめ」または「振り返り」の活動を取り入れることを大きく２本柱とし、つまずきの共有化を図ったり、生徒が自らの課題に気づいたりすることで、自らの学習を調整し、主体的に学ぶ生徒の育成を目指したいと考える。また、継続して「ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくり」の研究を進めることで、よりよい学習環境を実現できると考える。そして、生徒が夢や希望に向かって明確な目標をもち、主体的に学習するための手立てをより具体的に提示することで、生徒一人一人の意欲を高めることをねらいとして本研究主題を設定した。

２　研究のねらい

(1) 生徒のもつ疑問や「ズレ」を拾い上げ、ともに学習課題を設定し、問題解決に向かうことが生徒の学習に対する切実感・必要感を強めると考える。また、生徒の疑問を共有することでつまずきの共有化を図ることをねらいとする。

さらには、授業づくりにおいては、教師や生徒によるUDチェックの評価も参考にしなが ら、「様々な指導の工夫や手立て」「個に応じた適切な支援」に重点をおき、進んで学ぶ生徒の育成や基礎学力の向上を目指す。

(2) まとめや振り返りの活動を充実させ、学習者自身が本時のねらいの達成や予習・復習の課を明確にする。学習者自身が振り返ることで学びと評価が一体となり、より主体的な学びが充実する。さらに、指導者が小テストや口頭などで定着度を確認し、個に応じた課題を与えたり、添削指導などを行ったりすることで、生徒はより深く学び、学力向上につなげることを目指す。

３　研究仮説

(1) 問題解決的な学習により、自ら疑問を抱き、もちえた仮説が理にかなうかどうか自分で考える過程の中に学習の目的があることに気づくことができる。また、ユニバーサルデザインとキャリア教育の視点も継続して取り入れることで、基礎的・汎用的な能力を高めることにつながり、主体的に学習に取り組むことができる。

(2) まとめの段階で、自分の意見を伝えたり、他人の意見を聞いて自分の意見と比較したりすることで学びが深まるとともに、友人のよさや共に学ぶことのよさに気づくことができ、さらには、課題も明確になる。分からないことに気付くことも大切な学びであり、新たな課題を発見することができれば、自主学習ノートや家庭学習の取組に反映させることができ、次の学習に生きる自己評価となる。また、日常生活とどのように関連するか考えたり、学びの価値や楽しさを実感したりすることにもつながる。

４　研究内容

(1) 問題解決的な学習の工夫

生徒が自ら問題を発見し、主体的に問題解決に向かえるよう、授業の導入から課題設定までにおいて教師の働きかけを工夫する。そこで生徒に「ズレ」の問いをもたせることにより、主体的・対話的な学びの実現につなげていく。

流れとしては、問いの意識こそが対話を活性化させ、興味をもつことが学ぶ意欲につながる。また、自分以外の人の意見を聞くことで思考も変容していく。さらに、間違えるとリベンジしたい気持ちにつながり、生徒は自らの知識と経験を駆使して、問題解決に努めようと意欲的に取り組むようになる、ということである。

よって、以上のことを念頭に置きながら、授業の導入部の教師の仕掛けを工夫した授業づくりに取り組みたい。また、学習課題、流れ、まとめについてはユニバーサルデザインの視点を生かして効果的に提示することとする。

(2) まとめの指導の工夫

授業のまとめの段階で、自分の意見を伝えたり、他人の意見を聞き自分の意見と比較したりする機会を設ける。また、学習内容を定着させるために、小テストや振り返りの活動を取り入れる。小テストの解答状況や理解したことを言葉で表すことによって、学習内容のつまずきや定着度を把握する。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	研修予定（学年・授業者・講師等）	全体会等
４	１２	教科研究主題　共通理解	全体会（共通理解）
９	２２	教育指導課・センター訪問	授業参観・協議
１１	９	JS 小学校授業見学(金浜小学校)	授業参観・研究協議
２	２１	今年度研究報告（研修係）	全体会（成果と課題）

(2) 一般研修

月	日	研修予定内容　（担当等）
４	１３	一般研修　「問題発見・解決能力を育成する授業づくり」 (八戸市教育委員会教育指導課　福田秀貴 主任指導主事)
５	１８	「命の大切さを学ぶ講話」 (県警本部警務部警務課犯罪被害者支援室　心理専門官　冨岡拓身副参事) (県警本部警務部警務課犯罪被害者支援室主任　工藤芙美子巡査部長)
７	５	「市スポーツ大使ふるさとセミナー」 (青森ワッツバスケットボールプレイヤー　野里 惇貴選手)
１１	１	食育講演会「あおもり食命人による調理講座」 (八戸プラザホテル取締役 総料理長 須田忠幸さん)
１１	６	創立 70 周年記念教育講演会 「命の授業～ドリー夢メーカーと今を生きる～」 (講演家　腰塚勇人氏)
１１	３０	いのちを育む教育アドバイザー事業「性教育講演会」 (西村産婦人科クリニック　梅本実香先生)
１２	１９	薬物乱用防止教室「薬の使い方講座」 (薬剤師　松山信彦先生)

６　研究の成果

(1) 教師は積極的に生徒たちの気づきやズレなどをすくい上げ、可能な限りではあるが、それらを共有して全体の課題として設定する導入の仕掛けを､授業づくりの柱として取り組んでいる。学習課題が明確化され、課題に対する集中や自分事としての関わりなどの点において向上が見られる。また、これまで学んだ個々の知識が生徒の中でつながり、それが生徒一人一人の問題解決の意欲を喚起・向上させることにつながっている実感がある。

(2) 生徒の学校評価アンケートでは、「授業での学習課題が提示され、まとめや振り返りのある授業」について「そう思う」の A 評価が 50 %、「どちらかといえばそう思う」の B 評価が 30 %で、全体の８割である。

　職員の回答では、A 評価と B 評価を合わせて 100 %であり、授業のほぼ毎時間に、まとめの段階で小テストや振り返りの活動を取り入れ、学んだ内容を再確認している。生徒は自分の言葉で振り返り、自分と他者の意見を比較したり、他者の意見を取り入れたりしながら、学習内容を深めることにつながっている。

７　研究の課題

(1) 問題解決型学習の実践では、多くの長所がある一方で課題もある。生徒数が少なく、能力差も大きい中で、学習課題を導き出すにあたり、問題発見能力の高い生徒の発言が全体の課題として取り上げられることが多い。徐々に、自分なりに問題意識をもち、問題解決に向けて取り組める生徒が増えてきた手応えを感じているが、思考の深まりが依然として乏しい。

　また､教師側が課題とめあてを一致させようとすることで発問が狭まってしまうことも多く、仕掛けのバリエーションに苦慮している。成果を実感するには高度な内容でもあり、引き続き研究を重ねていく必要がある。

(2) JS目標学習時間の達成率は１学年75%、２学年29%、３学年10%であり、全校的に学期や学年が進むにつれ減少傾向にある。まとめの活動が、学習の達成感を味わうことや、次時につながる学習意欲と見通しをもつことまでに至っていない。生徒のまとめの活動から成長が見られた生徒を褒めたり、個別の指導を行ったり、効果的な学習方法を具体的にアドバイスしたりするなどして、生徒が学習の調整を図りながら、ねばり強く取り組む力の育成を目指した授業づくりが必要である。

（記入者　小峠佐和子）